



小さな世界



写真と文 藤井 醇



小さな世界を

ちよつとご案内



クロアゲハ

庭先など最も身近な虫たち

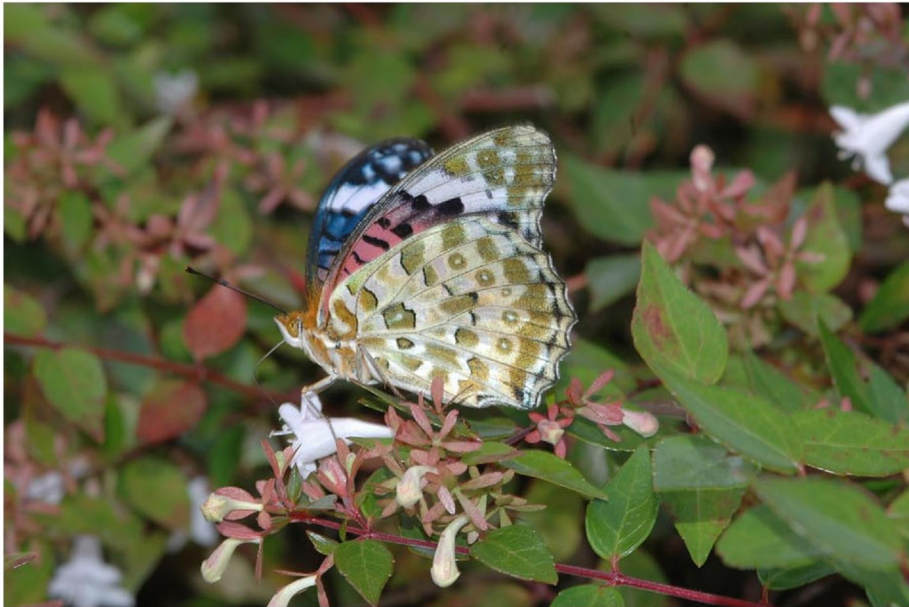
ベニシジミ

庭先 わずかな空き地 畑の隅 田んぼのあぜ道など
春先から秋まで いつでも身近にみられる可愛らしい
小さなシジミチョウの一種 です



ツマグロヒョウモン

豹の紋様をしたチョウのグループの一種で昔は静岡地方より西の方に分布していましたが 10年～15年前には東京周辺で普通にみられるようになり 2・3年前からは信州でも普通に見られようになってしまいました
温暖化の影響が大きいようです



ツバメシジミ

最も身近にいるシジミチョウの一種で 幼虫はハギなど
マメ科の花、若芽などを食べている どこにでも見られ
るが愛らしく 好ましい姿である



アゲハの羽化

夏場では あおむしがサナギになって7~10日もすると
サナギから チョウがうまれます
生命の誕生はとても感動的な場面で 何回でも撮影した
いと思いますが なかなかチャンスは掴めません



イトトンボ

イトトンボの一種が産卵行動をしています イトトンボの産卵は殆ど雌雄の共同作業です 直立しているのがオス 睡蓮の葉の上に水平に止まっているのがメス ほぼえましく 美しい形でもあります





ギンヤンマ雌雄

ギンヤンマの雌雄が博物館の庭の小さな池に産卵に来ました
珍しくサブカメラしか持っていなかったのですが、一応は撮りま
したが 翌日もう一度出かけてきました
あまり期待はしていませんでしたが 暫く待っていると、
今日もやってきました 同じ固体かどうかはわかりませんが
目的ははたせました

シオカラトンボ

彼にとっては 大きな獲物を捕らえ食べています
ハエやアブ程度の大きさの昆虫を捕食することが多いの
ですが 時にはこんな大きな獲物を捕らえる事もあり
びっくさせられます



ちょっと里山へ

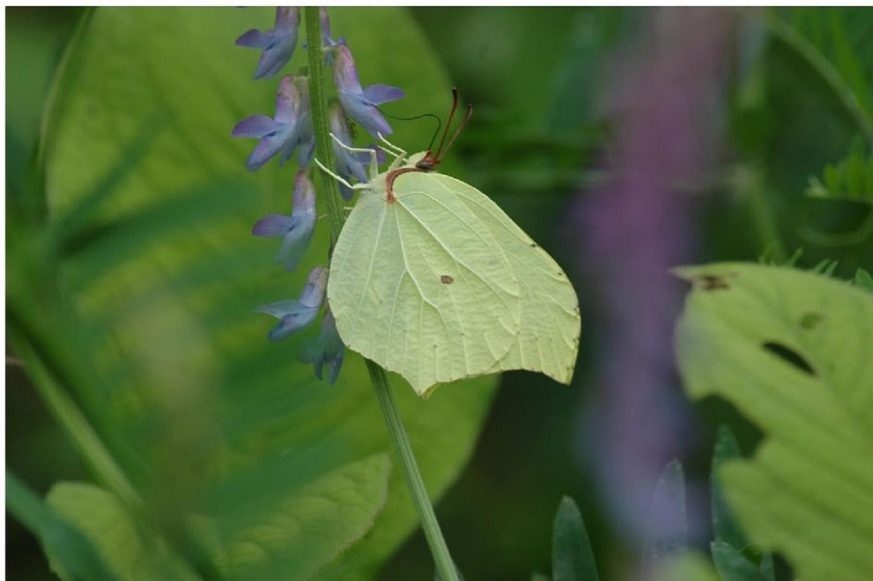
ウスバシロチョウ

モンシロチョウの仲間と 誰でもが思っていますが
実は アゲハチョウの仲間なのです
長野市周辺の里山には 5月～6月頃たくさん見られます



ヤマキチョウ

前翅の先端がシャープに尖る。羽の色は やや青みを
帯びた黄色、里山で普通にみられる。



ゴマダラチョウ

本種のいとこくらいの 切手にもなっているオオムラサキは大きく美しいせいか
全国あちこちで保護され 個体数が大幅に増えたようですが 同じエノキの葉を
食べているゴマダラチョウは色彩が地味で小型で目立ちません
最近ではゴマダラチョウの方を手厚く保護しなければいけないのでは と思うほ
ど 見なくなっています

写真はエノキの葉裏に産卵をしているゴマダラチョウと 生みつけられた卵を
クローズアップした物で 水色のきれいな卵です 実際は直径1ミリほどです



宝石のような 甲虫たち

ルリボシカミキリ

数多の美しいカミキリの中でも格別 冴えたルリ色の地に黒い単純な丸い紋だけだが シンプルな美しさに惹かれる人が多い

大好きなカミキリ的一种である





ジュウシホシ クビナガハムシ

日本の在来の種かどうか確認できませんでしたが アスパラの畑以外で見たことがないので 外国からアスパラと一緒に入ってきた虫なのかもかも知れませんが 害虫は困りますが ちょっと愛嬌がありますね

ハンミョウ

漢字で「斑猫」と書きますが イメージが掴めますか？
英語では「タイガービートル」 いずれにしても トラ
かネコが連想されています

地表を疾走し 他の昆虫などを捕食するようすからの
連想でしょう 山の道などで 人の先 先と疾走するの
で「道おしえ」とも呼ばれています





カメノコテントウ

最大のテントウムシといっても12ミリくらい
信州には多い これも我家のベランダに飛来したのを
撮影 幼虫が他のテントウと違いクルミハムシの幼虫
を食べる それでサワグルミの多い信州に多く見られ
のでしょう

南国 八重山の 虫たちの美しい色彩



オオゴマダラ

日本最大級のチョウで 日本では沖縄・八重山だけにしかいません 羽ばたきはゆったりと スローモーション
を見るよう

ベニモンアゲハ

南国のチョウらしい派手な色彩です

冬でも平均気温が20℃以上ある沖縄の八重山地方では
一年中花が咲き美しいチョウたちが飛び交っています





イシガキチョウ

この写真を観て ビアズレーの絵を連想すると一人の友人が云った もう一人の絵描きの友人いわく 殆どの絵描きが自然から影響を受けているのだ ビアズレーもその一人であると 言い直す 蓋し名言である

ナナホシキンカメムシ

沖縄 八重山で初めて見た 美しい金緑色に輝くカメムシ
シ 脚だけが見事な赤色 なんとオシャレな！ 思わず
唸ってしまいました
この形 色彩をみただけでデザイナーも脱帽でしょう



人工物と昆虫



イナゴ 奈落を覗く

陶芸家のお宅を訪れ 庭に捨て置かれた壺の縁にバッタ
がとまっているのを見て 何気なく撮ったが意外におも
しろく 気に入っている

生態写真の画面に人工物が入るのを極端に嫌っていたが
邪魔にならぬものもある事が判った

アカトンボ

自然の中のアカトンボは勿論良いが こんな壺にとまり翅を休めているのも絵になっているなあと思う
自然界の邪魔になるような人工物はよくないとはっきり
いって 良いのかも知れない



飛んで灯に入る

この写真も電灯という人工物が入っていますが違和感はありません 夏の夜灯りに誘惑されて人家に現れる大型のヤママユガ科の一種 クスサン



飛ぶ棒



とぶぼう とんぼ

「小さな世界」 写真・文 藤井 醇

発行 アトリエ・フジイ

発行日 2013年3月1日

藤井 醇 プロフィール

1933年東京生まれ。生まれつきの虫好き。疎開で10歳から23歳まで自然豊かな信州で育ち、虫好きは更に高じ、親の心配、反対をよそに、その道を探る。上京、「豊島園昆虫館」に仕事をし、8年間「昆虫に仕える」その間必要に迫られ、昆虫の写真を撮るようになり、徐々に写真へと、スライド。新聞に掲載された一点の作品がさる出版社社長の眼にとまり、バックアップを受け、それを機に写真家として独立。

以来40有余年、昆虫の生態写真を撮り続けている。

10年前（1996年）再び信州へ。信州で若き友人を得、薦めでデジカメに切り替え、パソコンを教わり、使いこなせるようになり、長年撮り貯めた作品をデジタル化、保存など、人生の終局に向けて整理しつつ、冬季はパソコンで、昆虫、花、鳥などの絵を描いて楽しみ、「パソコン絵師」と自称している。

著書

「昆虫」 講談社ブルーバックスシリーズ

「ちょうちょ」「こうちゅう」「せみ・ばった・とんぼ」フレーベル館

「昆虫の観察と飼育」「昆虫と遊ぼう」他 黎明書房

「ふゆの虫」 福音館（科学絵本）

「みんなのせかい」 NHK出版

「ありとちょう」 鈴木出版 他多数

